

書評04

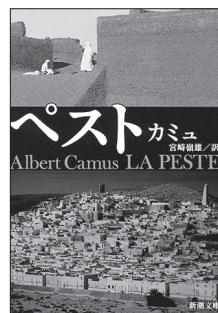
アルベール・カミュ 著・宮崎嶺雄 訳

『ペスト』

新潮社 / 1969 年 10 月刊 / 476 ページ / 750 円 + 税
ISBN 978-4-1021-1403-2

評者：杉 典生

くらしと協同の研究所 事務局



この作品はカミュが1947年に発表した小説である。『異邦人』に続く小説で当時大ベストセラーになったという。このコロナ禍で今また書店に積み上げられている。舞台は194X年のアルジェリア、オラン市という実在の都市（カミュ婦人の出身地であるという）であるが、ペスト流行そのものはフィクションである。まだアルジェリアがフランスから独立する前の話であり、いわゆるアルジェの闘いの前夜である。主な登場人物は、医者のリウー、資産家のタルー、公務員のグラン、新聞記者のランベール、犯罪人のコタール、司祭のパヌルーである。

物語は市内のあちらこちらでネズミの死体が発見されるところからはじまる。はじめは奇妙な現象と受け止められていたが、死者が出るにおよび、医者のリウーはペストの可能性を疑う。患者は鼠蹊部の併発症をとまなう熱病を発症しているが、権威ある医者は確証がでるまで待つべきだという。県知事に具申するも真剣に捉えてもらえない。しかし、リウーもこれがペストか、チフスによる熱病か、自分の判断に確信が持てない中、死者が少しずつ増えていく。ペストと疑う市民も出てくるが大方の市民は楽観視している。ようやく医療機関従事者も政治家もペストと断定するにあたり、都市の封鎖が始まる。そんな中であっても当初、ペストはすぐに過ぎ去るのではと大方の人々は考える。そしてかすかな希望を持ちつつカフェやレストランで会食をするのである。

しかし、感染者が増えるにつれ次第に市民の中に恐れや不安が高まる。人々は錠戸を閉めて家に閉じこもるようになる。悲観したペスト感染者が他人に抱きつき病気をうつそうとする。たまたま市外からやってきて閉じ込められた人々はなんとか街から逃げ出そうとする。配給される食料を闇で流すものもある。患者は強制的に病院に連れて行かれる。患者の家族は予防隔離所に入れられる。病院はペスト専門病棟となり、死んでいった市民は誰知られず墓場へと移される。棺が足りなくなり、遺体はそのまま焼かれる。

教会で日曜のミサが行われ、司祭のパヌルーは、ペストという災厄は神の怒りであり、人々の悪行がもたらしたものであり、悔悛し祈るようにと説教する。

リウーは医者としてなんとか市民を助けようとするが、血清もなかなか届かず、ペストと診断されたら見守るだけしかない。医師としての務め、責任だけが日々の診察に臨む原動力であるが、次第に疲れ、無力感に陥るようになる。

今回のコロナ禍で感染爆発が起こったイタリア北部の都市ベルガモではあまりの感染の速さに医療崩壊が起きた。コロナ患者専用の救急車は当初1台だったのが30台に増え、専用ベッドも不足し、助かりそうな人だけを搬送するという命の選別をしなければならなくなった。その際の医療従事者の苦悩は大変なものだっただろう（医療崩壊～イタリア・感染爆発の果てに

～NHKBS1)。

ペストというのは治療しない場合 60～90%の致死率と言われている。血清ができたおかげで治癒率は上がっているらしいが、それでも近年、世界各地で発生している。カミュが描いた時代は血清も少なく、人口 20 万の都市において毎日数百人単位で市民が死んでいく。医療崩壊ともいえる中、タルーやグラン、ランベールたちは保健隊（ボランティア）に志願し、日々病院の衛生管理や患者の見守り、死者の埋葬を手伝う。祈りだけではどうしようもないと悟ったパヌルーもそこに参加していくのである。

さて、この本は小説のかたちをとっているが、実は哲学書でもある。ペストでのロックダウンという状況を通じて、人々がどのように考え行動するのかということが独白や会話を通じて考察されている。ここでカミュは登場人物の言葉を借りて言う。“行動するのは目の前のペストに対してあるがままにそれと戦うことである。決すべきことは、できるだけ多くの人々をして、死んだり終局の別離を味わったりさせないようにすることだ。ヒロイズムというよりも幸福というものの惜しみなき要求だ。”

ランベールは、自分が恋人と一緒にいるために市外に出ていくのは卑怯なのか、人間の道から外れているのかと詰め寄る。リウーは君の望みも人間としては当たり前だ、ほくは医者として人々を看るだけだと返す。ランベールの考え方も“一種の拒否行動であり、気概がある”のだ。そのランベールも後には保健隊に入るのである。

犯罪者のコタールはこの災厄を歓迎している一人である。逮捕・裁判に怯えてきた身からすれば、市民が一樣に苦悩することは一種の平等意識をもたらしているのである。

タルーはリウーと共に行動し、人々の行動を記録し続けている。彼は、人は以前から皆ペストにかかっているという。これは比喩的に使われているのだが、人は皆人殺しにもなれるし、

それを見て見ぬふりをすることもできる。父親の検事が被告人に平然と死刑宣告を行ったり、自分も処刑現場を見たりしたことがいわばトラウマになっているのだ。そしてこれがペストであると。自分も同じであると。その考え方から抜け出したいと常に思ってきたタルーは保健隊で活動することが自分を解放する手段だと考えたのである。

カミュが『ペスト』を書き始めたのは 1941 年頃らしい。第 2 次世界大戦の真最中でフランス全土は独軍に占領されていた。自由にもが言えず重苦しい状況であったと思う。まさに閉め切られた都市でのペスト蔓延のようだったのではないか。“人々は有する個人的なものを断念せざるを得ず、他人と同じことしか考えず、希望さえも抱かず、早く終わってしまわないものかと永い眠りにについていた”のである。

表紙裏に 17 世紀のロンドンでのペスト禍を描いたもうひとつの『ペスト』の作者、ダニエル・デフォー（ロビンソンクルーソーの作者）の文章が引用されている。「ある種の監禁状態を他のある種のそれによって表現することは、(中略) 理にかなったことである。」このことから、『ペスト』の構想にフランス占領の影響が色濃く出ているのではないかと考えられる。

全編を通じて、ペストという見えない敵に対する恐怖や虚無心は描かれているが、患者となった家族、知人、友人に対する描写は温かいものである。子どもに対しては厳しく突き放した態度をとっていた紳士が、息子を亡くした時に崩れてしまう。搬送されたら 2 度と会えないからと患者である家族をいつまでも部屋にいさせようとする人々。死ぬという事に対する恐怖はあるが一方で受け入れる。一部の政治家がコロナ禍は戦時だ、と言っているが、まさに戦争を体験してきたカミュがペストを通じて戦争を批判しているようでもある。訳者の宮崎嶺雄氏の解説にもあるがこれは「悪」に立ち向かう連帯の書でもある。